

心理援助職の職場外研修の傾向と 職場内研修のあり方：研修タイトルの分析を通じて

The trend of off-the-job training and a discussion about on-the-job training for clinical psychologists: Through an analysis of training titles

横澤直文・中井あづみ

要約

本研究の目的は、心理援助職の職場外研修の傾向を検討し、その検討をもとに職場内研修のあり方を探ることであった。関連する団体が実施する職場外研修のタイトルを収集し、傾向を検討した。テキスト分析の結果、最頻出語は「認知行動療法」で、2番目に頻出した語は「発達障害」および「理解」であり、「入門」、「ワークショップ」がそれに続いた。職場外研修は、比較的経験年数の浅い人を対象に、社会的要請に応じた体験的な研修が提供されている傾向が示唆された。この傾向から導かれる職場内研修のあり方として、職場外研修で提供される内容を補うような内容を提供することや、職場外研修であまり行われていないようである「研究」に関する内容を提供することが示唆された。

キーワード：心理援助職、職能、職場内研修、職場外研修、テキスト分析

1. 問題と目的

変化し続ける社会の中で、心理援助職がクライアントや患者のニーズに沿った援助を提供し続けるためには、手持ちの知見や技法を絶えず見直し、洗練させ続けることが求められる。職能団体の倫理綱領（日本臨床心理士会、2012）では、「専門的知識及び技術、最新の研究内容及びその成果並びに職業倫理的問題等」の職能的資質について、「研鑽を怠らないよう自らの専門家としての資質の向上に努め」ることが義務づけられている。心理援助職が学び続けることと臨床家としての職能は関連することが明らかになっている（Bradley, Drapeau, & Destefano, 2012）。

心理援助職も、各が研鑽に努めているようである。日本臨床心理士会（2012）の会員を対象にした調査によると、89.4%が職場外での研修に参加していた。スーパーヴィジョンとは分けて回答させていることから、集団で行う講義形式の研修への参加と推察される。集団研修や

ワークショップは、参加者が共に職能を向上させる確かな機会とされている（Sheikh, Milne, & MacGregor, 2007）。

上記の調査では、職場内の研修は職場外のものより低率であった。職場外での研修が89.4%であったのに比べ、職場内での研修の参加者は50.3%であった（日本臨床心理士会、2012）。職場外研修の参加率が高いのは、内容に魅力をより感じたからではないかと考えられる。新奇性の高いテーマや講師といった内容は、職場外研修のほうが選択肢が広がると考えられる。

ただし、職場内研修は、職場外研修にない側面を持つ。職場内研修は、費用や場所といった点で参加しやすいことが多い。参加者は職場の同僚であることが多く、質問や意見を比較の出しやすい。より実際に即した内容を選びやすく、職場の成員が共に職能を向上させる機会ともなる。個人の職能向上と集団としての機能の向上が、共に期待できる点は長所と言える。

上記より、職場内外で行われている研修は、同じ内容を扱ったとしても、向上させる職能

は異なる部分があると考えられる。Bradley et al. (2012) は、臨床家としての自己評価にはネットワーク作りが、有能感には文献講読がより関連すると報告して、研修内容によって向上する職能に強弱があることを示し、複数の研修機会を持つことの大切さを示唆した。職場外研修だけでなく、職場内研修にも参加することにより、職能の総合的な向上が期待しやすくなると考えられる。

職場内研修の参加率を上げるためには、参加率の高い職場外研修の内容を参考にするとよいと考えられる。また、職場外研修の内容を職場に沿って応用的に提供することも考えられる。職場内外の研修を相補的に組み立てることにより、理解がより深まると考えられる。しかし、職場外研修の内容の傾向は明らかになっていないようである。また、職場内研修の内容の傾向が把握できるデータの収集は難しい。

そこで本研究では、まず、心理援助職の職場外研修の内容の傾向を概観することを目的の1つとする。心理援助職が多く加入する団体が提供する職場外研修のタイトルを収集して、その傾向を検討する。職場外研修の内容から職場内研修のあり方を探ることを、2つめの目的とする。

2. 方法

日本心理臨床学会と日本臨床心理士会が実施した研修会のうち、ホームページに記載のあったタイトルを全て収集した。サブタイトルがある場合はそれも含めて収集した。日本心理臨床学会は、心理学に関する国内学会としては最多の会員数を有しており、日本臨床心理士会は、臨床心理士の資格を持つ者の職能団体である。いずれも心理援助職が参加する団体として全国的で比較的大規模であり、全体の研修の傾向を把握しやすいと考えた。両団体のどちらにも所

属している人がいると考えられたが、学会と職能団体では会の機能が異なることから提供される研修の傾向も異なると考え、どちらからも収集することにした。心理援助職に関する他の学会や私設団体が提供する研修は、機能が上記の会と部分的に重複する可能性があることから収集しないことにした。

3. 結果

日本心理臨床学会と日本臨床心理士会の研修会のタイトルをホームページから収集した。日本心理臨床学会(2015)は2011年度から2014年度まで、日本臨床心理士会(2015)は2009年度から2014年度までの研修会のタイトルがホームページに記載されていた。収集したタイトルは、合わせて278であった。1つのタイトルに同一の語が2回以上使われていた場合は1回と数えた。研修会の中には、同一タイトルで複数回実施されたものもあった。これは研修機会の傾向の1つと捉え、記載されているまま収集した。

収集したタイトルについて、テキスト分析を行った。KH Coder ver. 2 Beta. 32c(樋口, 2004)を用いて品詞別に語を抽出したところ、1,764語が抽出された。この中から、研修内容を端的に表すと考えられる品詞として名詞と動詞を自動抽出したところ、299語であった。これを頻出度順に集計した。2回以上挙げられた語は127語であった。最頻出語は「認知行動療法」で32回、2番目に頻出した語は「発達障害」および「理解」で30回、4番目は「入門」、5番目は「ワークショップ」であった。それぞれの頻出語が総タイトル数に占める割合を求めたところ、「認知行動療法」は11.51%、「発達障害」および「理解」が10.79%、「入門」は10.07%、「ワークショップ」は7.91%であった。上位約3分の1にあたる41位54語をTable 1に挙げた。

Table 1 頻出上位語 (名詞, 動詞)

抽出語	出現回数	総タイトル数に占める比率(%)
1 認知行動療法	32	11.51
2 発達障害	30	10.79
2 理解	30	10.79
4 入門	28	10.07
5 ワークショップ	22	7.91
6 実際	21	7.55
7 支援	20	7.19
8 アセスメント	17	6.12
9 心理療法	15	5.40
9 特別支援	15	5.40
11 学ぶ	14	5.04
12 実践	13	4.68
12 心理	13	4.68
12 対応	13	4.68
12 統合	13	4.68
16 具体的	12	4.32
16 講座	12	4.32
16 自律訓練法	12	4.32
16 体験	12	4.32
20 コラージュ療法	11	3.96
20 子ども	11	3.96
20 働く	11	3.96
23 家族療法	10	3.60
23 理論	10	3.60
23 臨床心理士	10	3.60
26 基礎	9	3.24
26 心理臨床	9	3.24
26 精神分析	9	3.24
29 アプローチ	8	2.88
29 研修	8	2.88
29 問題	8	2.88
32 活用	7	2.52
32 個人療法	7	2.52
32 査定	7	2.52
32 産業心理臨床	7	2.52
32 自我機能	7	2.52
32 質的研究法	7	2.52
32 中心	7	2.52
32 統合的	7	2.52
32 日本版 WISC- 知能検査	7	2.52
41 カルト	6	2.16
41 ストレスマネジメント	6	2.16
41 学童期	6	2.16
41 事例	6	2.16
41 人	6	2.16
41 素材	6	2.16
41 体験的理解	6	2.16
41 特別	6	2.16
41 乳幼児期	6	2.16
41 箱庭療法	6	2.16
41 表現療法	6	2.16
41 描画	6	2.16
41 夢	6	2.16
41 臨床	6	2.16

4. 考察

職場外の研修の傾向を概観するとともに職場内研修のあり方を探ることを目的に、心理援助職が多く属する団体が提供する研修のタイトルを収集した。テキスト分析を行ったところ、頻出語は、順に「認知行動療法」「発達障害」および「理解」「入門」「ワークショップ」であった。最頻出語の「認知行動療法」は、総タイトル数の11%以上で用いられていた。

心理援助職には4つの援助方法があるとされる。心理アセスメント、心理面接、臨床心理的地域援助、研究活動である(日本臨床心理士会, 2013)。上位41位に上がっていた語には、この4つに関連すると考えられる語がそれぞれ挙がっていた。心理アセスメントに関しては「アセスメント」「査定」「日本版 WISC-知能検査」といった語、心理面接は「認知行動療法」「自律訓練法」「コラージュ療法」といった語、臨床心理的地域援助では「子ども」「産業心理臨床」「カルト」といった語が見られた一方で、研究活動に関する語は「質的研究法」のみであった。研究に関する研修数が比較的少ないことが示唆された。研究は「臨床心理学の知見を確かなもの」(日本臨床心理士会, 2013)にする活動である。研究に裏付けられた実践を行うために、研究に関する研修をさらに提供する必要が示唆された。

最も頻出した語は「認知行動療法」であった。近年では、認知行動療法は様々な領域でニードが高まっている。例えば医療領域では、2010年度の診療報酬改定で認知療法・認知行動療法が保険点数化された。教育領域や (ie., 高橋・石川・井上・佐藤, 2015)、産業領域においても (ie., 奈良, 2013) 取り入れられている。社会的なニードに比して、認知行動療法を実践できる心理援助職の数は充分ではないと考えられる。鈴木 (2014) は、日本における認知行動療

法の実践家の育成は急務であると主張し、欧米のマニュアルは文化的になじみにくいため、日本人を対象とする熟達者から直接かつ実践的に学ぶことが重要と述べている。認知行動療法を実践できる人が充分でないことは、職場内研修を行おうとしても、講師役を務められる身近な適任者が少ないことにつながる。そのため、職場外研修が増えると考えられる。

心理援助職が今後学びたいと考えている面接技法は、統合的・折衷的アプローチが74.4%、行動療法的・認知行動療法的アプローチが72.8%であった（日本臨床心理士会，2009）。統合的・折衷的アプローチは、認知行動療法的アプローチと同程度に学びたいと考えていた。統合的・折衷的アプローチに関連する語として、本研究では「統合」、「統合的」といった語が上位41位内に挙がっていた。日本の臨床心理学の課題として、方法論を統合し、専門活動を再構築することがある（下山・丹野，2001）。社会的要請に基づいて、複数の知識やスキルをどのように統合して心理援助を行うかを考える機会が提供され続けることは、今後も重要であると考えられる。統合に関してどのような内容が提供されているかについては、収集タイトル数をさらに増やし、語のネットワーク分析を行うと検討できると考えられる。

2番目に頻出した語は「発達障害」であった。発達障害は、子どもだけでなく成人についても注目され、関連する相談の増加が報告されている（伊藤，2013）。「発達障害」が上位語に上がったことには、対応が求められる場面が増えていることを示すと考えられる。

「理解」という語も2番目に頻出していた。「理解」に続く語は、「入門」「ワークショップ」であった。これらは研修内容や形式を表す語と考えられる。「理解」は研修の目的であり、研修の難易度は「入門」程度、研修形式は「ワークショップ」のような体験型が多いと示唆され

る。「認知行動療法入門」（日本臨床心理士会，2015）、「産業心理臨床の実践—働く大人の発達障害を理解する」（日本臨床心理士会，2015）、「ワークショップ—感情に焦点を当てた心理療法 うつへのアプローチ」（日本心理臨床学会，2015）といったタイトルが見られている。「理解」や「入門」といった語については、参加者の経験年数を考慮していることが考えられる。臨床心理士資格取得者は、資格取得後10年以下の層が55.36%を占める（臨床心理士資格認定協会，2015）。経験年数の比較的浅い人を対象にした研修が多く提供されていると考えられる。「認知行動療法」は、実践者の養成が急務であることから（鈴木，2014）、経験年数にかかわらず「入門」の機会が設けられていると考えられる。「ワークショップ」は、「多様な人たちが主体的に参加し、チームの相互作用を通じて新しい創造と学習を生み出す場」（堀・加藤，2008）である。参加者間の対話を通じて、研修内容と各の臨床活動との接点が見つけやすくなると考えられる。

以上より、職場外研修は、社会的要請に基づく内容を、経験年数の比較的浅い心理援助職も取り組みやすい難易度で、体験型の研修が多いことが示唆された。

上記から職場内研修のあり方を考えると、職場内研修においても、社会的要請に対応することは重要であるため、職場外研修で取り上げられた内容を職場内研修でも学ぶことが考えられる。難易度を考慮することも研修の要点である。入門程度の知識を前提に、実践時のポイントといった理解した後の研修目的を設定したり、難易度を上げたワークショップを行ったりといったことが考えられる。

本学心理臨床センター（当センター）でも職場内研修を行っている。経験年数の比較的浅い心理援助職を主な対象とした事例検討が中心である。今後、より系統的に研修を組み立ててい

くためには、当センターのスタッフが参加した職場外研修を報告したり、興味を持っている研修のヒアリングを行ったりして、職場内外の研修の接点を見つけることが考えられる。認知行動療法のアプローチからケース・フォーミュレーションを行ったり、研究活動に関する関連書籍を充実させたりすることも考えられる。

研修形式には対面型と非対面型がある。本研究で検討した職場内外の研修はいずれも対面型であった。近年では、eラーニングといった非対面型の研修形式もさかんになっており、心理援助職の研修でも増えていくと考えられる。今後の課題として、非対面型研修の特徴も含めた研修のあり方を検討することが考えられる。

引用文献

- Bradley, S., Drapeau, M., & Destefano, J. (2012). The relationship between continuing education and perceived competence, professional support, and professional value among clinical psychologists, *Journal of Continuing Education in the Health Professions*, **32**, 31-38.
- 樋口耕一 (2004). テキスト型データの計量的分析：2つのアプローチの峻別と統合 理論と方法, **19**, 101-115.
- 堀 公俊・加藤 彰(2008). ワークショップ・デザイン 知をつむぐ対話の場づくり 日本経済新聞出版社
- 伊藤絵美 (2013). 認知療法の基礎と応用 臨床心理学, **13**, 191-195.
- 奈良元壽 (2013). 産業場面への適用 臨床心理学, **13**, 239-243.
- 日本心理臨床学会 (2015). 研修会
(<http://www.ajcp.info/>) 2015年3月29日取得)
- 日本臨床心理士会 (2015). 臨床心理講座
(<http://www.jsccp.jp/center/lessonschedule/schedule>) (2015年4月13日取得)
- 日本臨床心理士会 (2009). 第5回「臨床心理士の動向ならびに意識調査」報告書
- 日本臨床心理士会 (2012). (社)日本臨床心理士会について 定款・規定等 05. 倫理綱領
(<http://www.jsccp.jp/about/statute.php>) (2015年3月29日取得)
- 日本臨床心理士会 (2013). 臨床心理士とは 援助の方法
(<http://www.jsccp.jp/person/support.php>) (2015年3月29日取得)
- 日本臨床心理士資格認定協会 (2015). 「臨床心理士」資格取得者の推移
(<http://fjcbcp.or.jp/shitokusha/>) (2015年4月13日取得)
- Sheikh, A. I., Milne, D. L., & MacGregor, B. V. (2007). A model of personal professional development in the systematic training of clinical psychologists, *Clinical Psychology and Psychotherapy*, **14**, 278-287.
- 下山晴彦・丹野義彦 (2001). 講座臨床心理学 1 臨床心理学とは何か 東京大学出版会
- 鈴木伸一 (2014). 臨床心理士の育成と認知行動療法のトレーニング 認知療法研究, **7**, 29-34.
- 高橋高人・石川信一・井上嘉代美・佐藤正二 (2015). 中学生に対する社会的問題解決訓練の効果 認知療法研究, **8**, 58-70.